

蝦夷風俗彙纂前編 十

ヲ 6
460
10

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 JAPAN Tama

門ヨ呂6
號460
卷10

蝦夷風俗彙纂前編卷十目次

○祭祀

祭祀の事

火神を祭る等の事

熊祭の事

○祝賀

婚烟の事

神を祭て相樂む事

○喪事

葬式の事

埋葬地ふ標木を建る事

葬祭ふ蠣殻を用る事

イムルの事

メツカ打の事

北蝦夷葬式の事

○祭祀追加

漁獵の爲ふ神を祭る事

神漁時を教へし事

神食料を教へし事

家内ふ神を祭る事

トウシカムイの事

カシカムイノミの事

神ふ伺て道を求め途中安全を祈る事

襟裳明神の事

神鳴物を好む事

神を祈るふ踊舞の事

義經朝臣を神よ祀る事

巖石を神と尊信せる事

神木の事

蝦夷風俗彙纂前編卷十目次終

蝦夷風俗彙纂前編卷十

繫之坐。吉慶。五穀。蟲魚。重幣。長天。而。好始。良田。民。也。
耕。高。不。然。耕。畠。生。熟。天。水。及。飲。必。祭。其。五。是。石。也。也。

○祭祀

不一。○祭祀の事

凡物之至尊者。名曰革木。一。日月神佛皆呼爲革木。一。蝦
夷中別無所奉之神。如烏自山。彌陀及各地所祠辨財天
女。皆係邦人之所奉。蝦亦禱請求漁獵獲。飲酒大會。名曰
革木。一乃不覓。所其謂神者。拜日月。禮源豫州。是已。相傳
豫州幼時入蝦夷。通其酋八面大王女。伺其出獵。竊所藏。

秘書一卷去。其事載在詞曲中。至今蝦夷每唱之。感慨流涕。西部有辨慶磯。又傳豫州平泉之時。潛入蝦夷。遂入滿州。此其開洋之處。其說孟浪可疑。吾聞文治伐奧之役。糠部津輕地方人遁入蝦夷者甚多。其或借豫州勇武之名。以恐喝蝦夷。亦未可知也。蝦夷呼豫州曰烏氣遇而容革。磯前者。訛論入夷皆作雛樣小船。獻酒其中。投之海以祭。木一磯亦在西部。其岩如佛像衣皴。面容儼然。凡舶之過。傳言不然。則舶至梨沉。凡飲酒必祭。其在屋下。以匕染酒灑之。坐右楹在無屋處。直供之天。而後飲。十月十一月之間。有祭熊之儀。其實非祭熊也。蓋祭天神地祇也。熊則其

牲云。當其時一部諸酋盡集。各獻牲或二熊或一熊。皆稱家富儉。熊皆生平所畜養者。故以齡長相誇。富者以三四齡者爲牲。酋中以最貴者一人爲主。其餘皆爲客。既築壇擊熊。其前每客進弓矢一具。主人請客射之。客固辭。主人乃起。注矢爲射。熊而退。而後絕繫放熊。客主如圍亂射。屠割薦之壇前。當將薦時。女蝦別具酒餅。祭所殺熊。乃生平乳養恩情之所爲。則祭熊之爲祭天地昭昭也。蝦夷呼其月曰。一乃覓子氣。名其祭曰。一要麻木敵。凡祭神割木。如流蘇。插立之神前。名曰。一奈和。口呪曰。樂一遇烏由而詩客禮。蝦夷風土記。

蝦夷ふ無曆。歲且歲末の式も不知。世俗賤み笑へどす。委く窺ふ暑寒を以。年戎算へ。月の晦朔を量。及氣候を窺ひ。四時八節を考す。家々二月祭あり。月祭ふを名越の祓ふ用る如く。茅の輪を作り。カムイシカナツケ也。號し。幣戎添海邊ふ建て祓言也。是を禱るの日といふ。歲戎大祭也。大概冬至の時。一邑戎酋帥たる者。天地火風水の神を祭る。天モカントウカムイ。地モカナンナシリカムイ。火モアベカムイ。風モレテカムイ。水モワツカカムイ。といふ。是戎ヤウマンデといふ。行之壇戎設け。四方ふ柳を削りたる幣戎建て。日本の武器及クワサ

キシトキ戎類等。所在財寶を飾り。造酒此爲ふ。凡一年戎出產戎以て。米麴を求め造る所の濁酒。富家を拾石餘。又郷中の者も分限ふ隨ひ造之。携來戎酋帥ふ與へて。以て偕ふ備ふ。

又兼て此爲ふ。飼置く所の熊を備へ。一邑の衆夷及親戚も。遠近戎不厭呼集め客とし。席戎正し各拜禮し終て。造酒を呑み二循して。主人弓矢を携出。客每ふ與へ。壇ふ備へし畜熊を請。射客。又先ふ射事を辭す。主人ふ譲る。而主人弓矢を執て。天地四方ふ向ひ射禮あり。次て客皆立。熊戎射。又射殺たる熊ふ供物あり。畢て。熊の

割肉を煮る。夫より饗宴日夜無窮。酒の盡るを以て限
リトキ。蝦夷拾遺

○火神戎祭る等の事
家内爐の隅ふ木幣を立。之戎アベカモイヒ唱へ。則火
ニ神奉して常ふ祭る。

旅中難所。又も出水等ふ出逢バ。其場ふ木幣を立。仰々
敷禮拜也。蝦夷雜書

○熊祭戎事

冬月ふ至れぞ。熊送モといふあと有り。古々夷人の飼
ねきる熊を殺モとたふして。夷中ニ一大祭なり。穴

熊有る。野熊ふ有り。雛熊戎捕來す。もじめハメノ
コサ手鹽ふかけて。乳ふどませて育て。け。やうや
く成長しぬ。家ニほとりふ丸木戎ふゝつ割ふ志
たる戎もて組立。井筒のあとくあらる檻をあはらひ
て入き置き。二歳ニ冬戎限モふ殺モとなり。かねて
一族一約し。オンコサ木戎もて。弓矢をおやく造す。濁
酒を釀して。仕度をなしおき。既ふそせ日ふ至れぞ。
族の男女寄り集ひ。家ニ重器を取出し。おゝふて殺さ
むとれもふ場所を撰ス。キナ筵をもて圍ひめぐらし。
カムイニ座をもうけ。其左右ヘイムシ。タヌ子。アム
太刀

のシニツ。セツツバ。ハヨクヘ。タントンベ。イカユア。ツエキ。
タカサラ。イクバシユイ。などの寶物哉。トミカモイと
孟臺。髻揚箸。

唱へて悉く飾つけ。水楊ヤナギをもてイナヲを削みて。所
々ふ建る。其家七八間を隔て。高さ三尺ほどふ杭を
立て。上ふ筆をもけ置きて。此所へいまざ引來らぬう
ち。大勢は男女。熊の居る檻は四邊戎。ホウシといひ
なぐら。手拍子戎うちて躍すめぐる。主そ家ふらうて。
あの日見舞悦びとして。入る来るものへ。それく式法
にて禮をなし。銘々へ酒戎盛り。髻揚箸を添て差出
す。客も式を正しく飲むことなり。凡あの間二時ぢり

す。や仕度せとひのひたるあら。主客一同熊の前ふ
至り。又躍すめぐる。あうして畜ぬし檻は蓋をとりの
け。みばあら熊の首小繩戎は辛てかざり付くるカム
イ北場所へ引もてゆき。首繩をなぐく北をして。中央
なる抗へ熊を繫ぎ置まく大勢よて躍り遠ること前
せおとし。熊を四邊戎睨みてまゆ。怒り呼吸せし
く吼す狂ふ。やがて夷人繩北端もて引出せを合圍ふ。
假の弓矢もて四方八面より射出せふ。そば矢幾筋と
あく熊北身ふたつをそ戎まく細長き木北先へ筆を
付たるをもてたちくる矢戎そらひ落してまふる。そ

其後邊より透を狙ひ射はくま。熊もたそれで狂ひ走る。あのときおの達が乳もて育てらげらるメノコ。其衆夷ども躍てめぐることなれども。熊も今限戎いまさらおもひやうほく。懲然として歎きかあしみ。熊よつて矢戎ちらひおとし。ものくるらしき有様なり。熊其勢おとろへたるころ。丸木五六本持出て。やうて熊戎おさへ首を挿めバ。夷人大勢いやう上ふ壓かさなり。轉びおはまゝ起き上までたしかざなる。かくなむ事數度。熊の息いよい絶ぬ達バ。一聲小祝詞を擧げ。徐よ引來まで。設けあきしかムイ其座よせゑ。

俯ふ伏さしめ。濁酒を盃よ盛みて供せることなり。あまよう衆夷も。カムイ其前ふ團居して。あま酒を酌む。これをカムイ飲といふ。これも終れば。其場ふて熊を解き。皮を剥ぎ膽を收めて持歸。その肉を羹ふ。あしてあま酒をくむ。飼主も流石小愁情少なうら襟ども。その穴を喰ひて酒を飲む。あとようほくてもおきし濁酒其の。これあま夷地の風習なり。弓矢も必童子其役なり。そもそも。熊をとるハ蝦夷地の専務ふて。他の器械を用ひ。いのる大熊なりとも。毒矢戎もいて射と

めるといふ。されば此技アツを幼兒時より學マサニる。す
詎ふて斯マサニることなり。乳をのむ石シロの小兒コノふる。
親シメ抱ハグり走ハシメルなぐら。弓タガ手ハンド戎カミもち添ハタフへ射ナシ。この日
も殊マサニよ速ハヤシがました時ヒメなれば。男ヒメたしあみおくる
刺繡ハスシのアツシ。その上アツシふ陣羽織ジンモリを着マサニし。女ヒメ色々縫摸
様マサニの小袖コヅシを着マサニ。首ハラふイムタツイムタツを懸ハシメルけ。耳環アツシあたしな
み。おくる金銀キンギンの類アツシを掛ハシメルる。夷ヒ人ヒトは歡樂ハスシをオムシ
ヤヒと熊送ハシメルとのとき。酒サケを飲マサニあらばう。肴ハシメルといふも
れあくハシメルたゞ鮭サカナのから乾ハシメル。則ハシメルテツヒラツヒラと名付ハシメルるものを
もて。下物サカナとなせ。蝦夷志ハシメルといふ。北海夷ヒ子ヒコも四絃シガツ

を彈ハシメルるものアツシ。疑ハシメルらくも胡琴ハクチならむアツシ。西
部ヒメもあらば。東部ヒメふぞ鳴物ハスシの類アツシ。決して見ハシメルらば。
たゞ木ヒメふて造ハシメル。江戸ヒメふても流行ハシメルせし。ビヤボンと
いふもせくハシメルおとた音ハスシ發ハシメルるものを。口ヒメ小街ハシメルへて。糸
戎ハシメルなぐら鳴ハスシら。こまハシメルモツコリといふ。東蝦夷夜話
其村々ハシメル乙名家ハシメル。飼置赤熊ハシメル成長ハシメルし大熊ハシメルとなりたる
を撰ハシメル。其乙名其熊ハシメルよ向ハシメル。因果因縁ハシメルを説ハシメルき示ハシメルして曰。
大幸なるうハシメルあハシメルづ熊ハシメルよく聞ハシメルけ。此秋ハシメルは氏神ハシメルは犧ハシメルよ備
ふなす。必未來世人間ハシメルと變生ハシメルべし。因て是戎樂ハシメルんで
潔ハシメルく犧ハシメルよ立ハシメルしと云ハシメル聞ハシメルせ。後縛縊ハシメルして一屋ハシメルふ牽ハシメル。前後

左右ふつなぎて。大勢群集して。枷せ桎せ杻せ等を容れ。堅固ふ圍ひて首ふ幣を立て。鉾太刀長刀其外種々此實器戎飾す。其後小其村比乙名を始め。其親類及び其近村の長立たるもの集みて。扱又家格新古等ふ依て。席ふ前後上下より。其席々ふ急度着坐す。是ふ於て射禮あり。銘々ふ次第を揃て矢戎放つ。幕目比射禮比如し。其式終まで後ふ。其熊ふ種々比供物等を備へ。佛家の百味御食を備て。施餓鬼供養をゆるべ如し。此禮式終りて後。其供物等を以て。近郷村ふ振舞ひなり。其後飾り置肉を煮焼して。濁酒を以て大酒宴あり。終日

終夜振廻ふぎやうなり。是大祭比禮式なり。土人是をイヨウマンテと云。則大祭禮と云義なむ。大身なる豪富比乙名家の冥利ふ興行する也。是年中海上ふて無難ふ家業をする。祝儀なりと云へ。蝦夷草紙

唐太嶋も亦蝦夷嶋のほとく熊祭をなし。其行事大抵異狀あることをなし。唯熊を養ふあと。凡二三年ふ至。漸长大ふして其事を行ふゆゑふ。そは熊檻を破す人を咬ことあらむあとを恐れ。時々その齒牙を斷去。先檻中比熊戎縛するふ。繩を以て弶を造ア檻中ふ入。繩比兩端を檻比左右ふ出して。二夷是を把り。一夷比

側よア竿戎檻中ふ入れて。涼をうけ熊比頭ふ纏ふを
待て。左右ニ兩夷繩を曳時も。頸束縊れて熊跳躍する
あとぬるをば。其時檻蓋を開きて檻中ト入す。其四足
戎縛して外ふ出し。衆夷捕擁して。其歯牙を斷去る。斷
器も鋸也。おとき物。小刀也。刃ふ刻痕をなしたる器ふ
して。夷比自製する所ろなり。祭時の殺法。蝦夷嶋も木
を以て壓殺し。唐太鳴も射殺を法とい。凡熊祭比事を
オロツコ。スマレングル。サンタン。ユルテツケ比諸夷
といへども。行ざる所ろなしと云。北蝦夷圖說

○イナヲの事

イナヲ。本邦ふいふ幣此類ひふして。まべて蝦夷比
俗も。質素淳朴なるよりて。天地比事よアはじめ。神
道を尊びおそる事。其國第一比いましめな。然る
ゆゑふ。何事をあまふはきて。先神明戎尊びまいる
事をほとめとして。あきをカモイノミと稱い。
カモイも。神をいひ。ノミも。祈る事をいひて。神を祈
るといふ事なり。日本紀ふ神祈と書て。ガモイノミ
と訓したる。とおれじ事あらん。器も。よの常川よ
其力モイノミを行ふふ。あらば此イナヲを用る
事ゆゑ。神明を祭るふ。大切な物と見る事な。あ達

を製せんとまれバ。イコイコイと云て。潔齋ともいひ
はべきさおふ。先其身を慎み。いさぎよくまる事をな
して。それより製まるふ。小刀やうは器也。よの常はも
用ひず。別ふイナヲを製まるためよ。たくへ置たる
を取出て用ふ。イナヲよなをべき木も。何の木とさざ
まりたるふもあらねど。いはき質の白くして潔き木
ふららされば用ひず。其削て出したる木は屑といつ
じ。猥ふそりとつる事をあらば。あとぐく家はかと
ちうの。ヌシヤサンふ納めたく事なし。

ヌシヤサンと云ふ。家邊小垣の如く木幣を立てる

所なり。是を年頃祈る所の神を祭り。獲たる所の大
魚の頭。熊鹿のかしらをさし置處なり。
其製まる所の形ちハ。神を祭る法もよぎひて。ご
とくくたゞひゆ。凡て是をイナヲと稱し。まゝヌシ
ヤヲも稱し。此ニ比語いまだざざごうあらばといへど
も。イナヲも稻穂の轉語成べし。

本邦關東は農家ふて。正月十五日ふ質白なる木をも
て。稻穂せ形ちふ作モ。糞壤ふたて。五穀せ豊饒を祈
る。是找イナホと稱し。此事いづふも。太古よりせ遺風
とあそ見えられ。されば此事比轉じ傳をみて。イナホ

戎。イナヲトコヤモリ稱するふや。また又シヤヒヘ
る事も。セアモア戎サキ。ぬきの轉語ふして。大麻の事
なるべし。此稻穂と大麻の二つも。本邦ふても。今比世
ふ及びても。形ちも替り事も同じからぬやうふ思ひ
なさるきど。いだきも天地の神明を祭る爲ためふ。設
るところの物ふして。其用る比意也。ひとしく今比幣
帛なり。今比幣帛も専ら紙を用ひ麻を用ゆきども。上
古比時。紙麻等比物。流布せざりし時も。木をもて製せ
し事はありぐんもあるべうらば。其時ふ阿ソリてそ。
稻穂も大麻もひとしく木をもて製せし事ふて。其本

邦の古めさまの傳承たるよりして。れのぼりライナ
ヲ。ヌシヤ等比稱も存するなるべし。是等の事ふよら
んふも。まさしくイナヲも幣帛の事をいふがおとく。
而まうみ本邦の事ふ近くきあえて。蝦夷の事ふ熟せ
ざらん人を。附會のあとのやうふせと思ふべくれど。
此事をうりふもいらば。奥羽の地ふして蝦夷の風俗。
その多く存し残すゝる事多しまこそ今比蝦夷ふて
も。失ひたるものや。かへりて奥羽の地ふ存し残すた
る事も少くならば。

ビン子アベシヤウシ。マチ子アベシヤマウシと。稱す

る二つイナヲ。此イナヲ。火神を祭る時。捧
け用るなり。アベモ火神事哉。シヤマモ物也。そぞ
茂いひ。ウシモ立つ事をいひて。火神モ。そぞ。お立つる
ナヲ。といふ事なり。諸シヤマ。といふ語也。ソバモ轉語
おして。ウシモアシモ轉語成べし。アシといへる事也。
おと立つ事をいふとみゆるなり。人モ脚を立しつゝ
つるも。立の事より出たるふや。机案の類也。まよお立
たるところを立しとのひ。其外雲立し。兩あしなどい
つる事也。皆其立る形をいへるなり。かく見る時モア
ベシヤマウシ也。火神モ。お立といふ事も通ひるな

り。此イナヲ。夷地のうち尻岸内といふ所より。東部
を經て。國後嶋の邊ふ至る迄。用るなり。此ニ川モ。ひ
としく火神を祭るふ用ふ。まともうち。ゆ
るふよりて。其形ちせりハ。起るなり。ビン子アベシヤ
マウシイナヲ。前ふいへると。同じ事ふて。男子火神
そぞ。お立るイナヲといふ事なり。マチモ婦女をいひ。子モ助語
なり。アベシヤマウシ也。又前と同じ事ふて。婦女火神
そぞ。お立るイナヲといふ事なり。此イナヲ。ふ男女の
えりあ有事也。火神ふ男女。立るといふ。よもやらば。

唯祭れるイナヲ。男女比ミうち向るよしなり。お達
を夷人ふ糺尋止といへども。いまざ其義比詳なる事
残得也。思ふふ乾男坤女比義。陰陽比二つを。男女
と分ちたる事なるべし。あれらは事誰教くるふも。の
うねど。用る所のイナヲ男女比ことなるふも。さがひ
て。其削きる形ち自ら仰伏せさがひて。陰陽の象を
表したる事。誠ふ天地比自然ふかくどるよてぞ。のる
べき。夷語ふ男子残ビ。と。いへる事。そ。其義いまざ詳
ならげ。婦女をマチ。と。いへる事。まさしく日本記ふ。
命婦と。りきてまちと訓したす。此マチ子アヅシヤア

ウシイナヲ。一ふそメノコアベシヤマウシイナヲ
ともいへす。メノコといふも女性事ふて。是もとりも
あわさび女子成べし。

キケノイチイナヲと稱せる二種比イナヲ。うち達モ家
中比安穩を祈るふ用ふるなり。キケとも物を削る事
をいひ。チも助語なり。ノイといふも物を捨る事をい
ひて。削モ捨るイナヲといふなり。此等は語もろ。本
邦の野鄙なる言葉ふ通ずるふや。本邦比詞ふ物を削
る事をカクといふ。カクもキケと通づべし。ノイも称
へと通じて。称ちといふ轉語成べし。さればキケノイ

チイナヲ。かきねぢるイナヲといふ義ふ聞也なり。
二種此内一も尻岸内邊より廣尾邊迄。一も廣尾邊より國後嶋此邊迄ふ用るなり。其形ち少しくたゞるのみ。

キケハアロセイナヲと稱する二種のイナヲあり。是を何と定うたる事なく。もべて神明を祈るふ用るなり。キケを前ふいふと同じ事みて削る事残いひ。ハアロを物せ垂搖くうちをいひ。セモ助語みて削アリた走搖くイナヲといふ事なり。此ハアロといへる者とをす。本邦此俗語ふ。物のか汲く垂れ搖くさまだぬ。所

うくといふ事。り。さればハアロも。ふありと通じて
キケハロセイナヲといふを削アヌあうとあくるイ
ナヲと。いふ事と聞ゆるなり。二種の形ち是も少しく
うそれるのみ。

ハルケと稱するイナヲ。り。ハルケと。繩せ事をい
ひて。繩せイナヲといふ事なり。まゝ一例よそトシイ
ナラともいふ。トシハ船中ふ用る綱せ事をいひて。綱
せイナヲといふ事なり。是も。のイナヲ。せ形。ら繩せ
ばとく。又綱せごとくふよれたる故ふ。かくも稱する
なり。此イナヲも。まべてカモイノミ茂行ふ。其家

四方の圍ひより初め梁柱等ふ至る迄。本邦の民家
ふて。正月注連を張たる如く捧げかざるなモ。按る
ふ本邦邊鄙比俗。注連ふそさむ紙をりきたれと稱し。
亦人家比門戸ふ。正月或そ神を祭る事ある時ハ枝比
まゝなる竹を。杭と同じく立て。注連を張り。其竹ふけ
けたる紙をも。又うきたきと稱す。かきされといへる
事も。あと削り垂るといそんぐ如き事なるを。紙ふて
製せし物ふ稱する事。其義向く違うとも思れ。是
を古ヘ紙製比事。いまご流布せざりし時ふも。邊鄙の
民家等ふて。あれら比物みあ質白なる木を用ひて

製せしより。たのづのらひに。それ等比名を唱一しな
るべし。今夷人比俗ふこ。比イナヲ用る事を。まさしく
か。本邦比上古比時。木ふて製せしろきたれの遺
風残傳へし事を見やね。す。

シユトと稱するイナヲあり。シユトと。あと杖比名
ふして。ウカルを行ふ時小用やる事のなり。
ウカルといふを。夷人比俗。罪を犯したる者らを。夫
をむちうつ事比有なり。シユトを其むちうつ杖
比事をいふ。

此イナヲを製せる小え。先木をシユト比形ち比如く

ふして。それより次第小削立る事をなすよりて。斯も名付しなり。本邦比語小罪人をうけ杖の事を志。あともいふ。されどシユトモ志本と比轉語ふして。是又本邦比語小通じる成べし。此イナヲそいはきの神を祈るふを通じ用ゆる事なり。

イコシラツケと稱ゆるイナヲア。イコシを守り哉。いひ。ラツケを物を掛け事をいひて。守りをかけおくイナヲといふ事なり。守りといへる。夷人比身残守護する所の寶器を守りといへる。夷人比身残守護する所の寶器をいふなり。其寶器も猶本邦の俗ふ。小兒比守袋など

いせんが如く。身残守りふねるよし。ひて。殊の外小尊ぶ事なり。

時有て此イナヲふ。其寶器を掛け。住居のヌシヤサンふ。かざり置て祈る事あり。其祈る事そあらしく意味深きよしぬれば。夷人比甚秘せる事ふて。人ふ語らざる故。其義未詳ならば。

チカツフと稱ゆるイナヲあり。チカツフと鳥の事をいふなり。是を養ひ置し鳥残殺を時も。此イナヲを用ひて。其殺せし鳥の靈を祭るなり。是よりて鳥比イナヲといふ心ふて。かく名付しなり。

凡夷人ニ俗。熊狐ニ類。其外諸鳥曳ウヒ置て。おきを殺モ事有る時。其靈を祭る事甚厚く。意味も又大とふ深し。別小部類をヨウちて。ほゞあるしたりといへども。いまだ詳あらざる事とも多し。

ハシト稱するイナヲ。ハシトモ木ニ枝ニ事をいふ。或なそち本邦小いふ柴ニ類。小て柴。ナヲと云ふことあり。あれも漁獵をせむとある時。先海岸にて水伯を祭る事有り。其時此イナヲを柴ニ藩籬の如く。小結置て捧ぐる事なり。其外コタンコル。また又シヤサンねどよ。捧げあちやる事もあり。

イアシト稱するイナヲ。イアシモ物をさしをさむ事をいひて。捕むイナヲと云事なり。あれも蘆を束ねて。そせ間ふもさむ事ゆゑふ。かくハ稱するなり。此イナヲを尻岸内邊より廣尾邊まで。夷人。住居ニチセコルイナヲ残まつる所。注連を張りたる如く。捧げ置事なり。

右小録せし外イナヲニ類。あまく有ヒいへども。其用る所ニ義。いまご詳ならざる事多き。故ふ。今暫く闕て録せば。後來糺尋ニ上。其義の詳なるを待て。録止べし。蝦夷國志

按るふ彼地のイナヲモ祈麻^サヒ義なるべし。蝦夷圖說
小稻穂の轉訛といへるも。いまざしき說なり。

因ふ云。麻をヲと呼ぶも。緒の義ふて。實ふ和名なり。

又アサといふを異名ふて。苧ふ績みしる又^{アサ}の義な

マ
又幣をシデヒ呼ぶも。麻をあらしたるが名目ふね
れるなり。木綿ハ猪ふて是モ麻也一種あり。木綿を布
ふ織^スる即タフぬうといへモ。此地所々ふ同名有ヌ
サウニ。又サミヤニ。エナラウシ等。總て同意なり。納紗日誌

蝦夷地ふて。病者ゐるときハ。イナヲふて武者ヒ形を
造り。佩刀鍔縁頭など飾^スはけて。枕^スもとふれく。こも
源判官義經の神靈なり。東蝦夷夜話

此イナホふよく似^スるといふも。韃且の中カルミユ
ツク國人の此所爲^ス。ラニ子ボ^ス先人^{シス}。和蘭本草。トハニ
を削りうけたる物を造り。是を地上^ス建^ム。あま残
居宅ふうけて。式禮の餅^スと^スる所有。此猶烏匿亞人
のヘラスソ。ヒナヅク^スる鬼神を祭る修法^ス似たり。別
て佛教を奉^スずる事なく。只天帝を仰ぎ物^スるのみ。若
病者^スは^ス。刀残^スつて。新ふ右の削^スうけを造^ス。是

をも以て其病者の頭をよび臂ふ纏ふ。此亦元モサモエテシ人比所爲なるよし。此サモエテシモ世モ云。小人島といふモのう。唐太嶋モ所々チシヤ城アヒトのといふもの有て。是モ小人島の營壘と。左もれむ是等の風俗ふふ。蝦夷より彼地へおひく傳習せしものならむとれる。蝦夷葉那志

○祝賀

○祝賀

○婚姻の事

夷家モ。前條ふいへる。又シヤサン比轉語。シヤサニヒ稱して。其是非モあらされど。柴垣を結て。是モ

鹿熊海豚等の頭を多くかけ。是をもつて天地の神をまいることなる。爰モ一感モべきこと有。彼地モて我娘を。何所の誰より貰ひふ來モしげ。如何なる男ならん。いきなる暮しをやなせらんと。たもふ時ハ。其先の家モ到マテ。此シヤサンモ見て。此柴垣モ上モ魚獸比頭多き家ならむ。能くわせぐ男あらむと。娘をも遣り。長く親類の因残なまことなり。此シヤサンモ。其晒モ所モ獸魚比頭少き家モ。彼家の悴モ不稼モ。又運上屋支配人等モ心有るものモ。此シヤサンモ氣を附見て。

其頭骨は多きもの。戎酋長となし。また小使土産取と定めて用ることなり。扱まゝ其家小病人ふても有歟。まゝ何事う占ふべきこと有ときも。其頭を地ふ下して。擲ても頂きゆること數度ふして。其吉凶を占ふ事有。是むりしの賣ト者流は。龜を焼のうらなひふも。よく似たりとれもある。まゝ此頭を擲て。縁不縁の占ふもあるよし。其故ふ此地ふて嫁を遣り。まゝハ笄取等を生るふ。本邦の如く十九廿歳ふもならで。やらぬのとらぬせといふこともなく。未だ幼き時ようして。親と親と相約し。またシヤサンふ祈て占を取り。本邦

の人也如く。面色は白きは黒きの。疤痕り有のヒ。忌嫌ふこともなく。只神の告ふまわせて。約束相とくのひ置。その壯年ふたよびて。婚姻生るも有ことなり。扱其契約相とくのひ々る時ふたよびても。互ふ家々よう身分ふ應じて。太刀短刀鎧耳盤をほくもに也有。手笞をつりもすも有て。それよりも一寸も其約を互ふ違ふことをなし。壯年ふたよびていよく今年いつ頃ふぞ。引取もいさし度といへど。その身分相應ふ。濁醪を作。又食物を用意して。歳長のもれを媒約人ふたのと置。其夜ふたよべど。媒人新婦を連て彼家ふ到る。其時新

婦を媒のうし候方ふ隱し置。先は舅姑聟を何から
ぬ面ふて。四方山せ談をあして居る間ふ。媒人も婦を
聟に傍ふ引行居らせ置て。圍爐に傍ふ至り。其始物影
見えぬやうふ。爐の火も消し。燈も消し有をば。其媒人
火を吹起し燈を點して。初て嫁の來まし事をえひや
うふ饗應しまさ嫁もそれより薪を折くべ。舅姑聟を
火ふかすらせるを。上首尾と。實ふ和むるをもひて。
家は吉事となし。まさ嫁の心得と。もるを。舅姑聟等を
も常ふ帶とけひろげふして。爐ふかすらせ一生暮さ
せ度と願ふをよしこと。男も已ぐ稼ふまくせて。妻茂

幾人を身分相應ふ。所々ふ置をよしこと。婦人もまつ
し。も嫉妬の心なく。妻妾もつまじく稼業怠慢なく暮
し。行々子供を多くもち。豪富とならんことを願ふ。
造嶋神の此島を南方の國よ。たとらぬ國とせんと誓
ひ給ひしを。朝夕ふ忘ることなき心得とぞ。實ふ皇
國の御稜威かふりて。島人を志勵するし成たり。

蝦夷奇觀

蝦夷葉那志同

蝦夷人の妻を貰ふふ。かひだ遣は事なり。この價と
いふも。夷人寶と唱ふる。太刀鍔目貫縁頭行器酒桶等
なり。是等の品茂遣して。縁を結ふ事故。寶なき者も妻

を持事成がこし。仍てロ^ノ中^{ナカ}蝦夷邊ふを。一人ふして二人位を限うたれども。奥地小至る程十人餘も渝しものあり。勿論定住の家を守るを本妻とし。其外を妾心なきども。夷人をやそり皆女房といへ。右數々め妾一所ふけるふてよなし。五里十里まゝぞ用事ありて。往返する所なきむ。既ふ十八里の渡海。夫より亦三十里ふあよぶ。厚岸は夷人國後嶋ふも女房を持て置なり。國後は夷人キイタツフふも女房ありて。一两年ふ一度づても渡海されば。其女の處を我家として。住居しけるなれども。常ふ衣食を與ふと云事有な

く。女そ其身稼て却てアツシを織。稼代ふて木綿を交易して。様々比摸様をもてやうふ縫。夫ふ是を送る戎女の役とせり。右故ふ女房澤山持たるものほど。經營安きことふて。日本とも事かそれ。蝦夷土産

蝦夷紀事ふ婚姻也。一族は縁を引てとり結び。遠所ふたりといへども。いひかもして。因縁たるものなし。家頼も世々家族なり。是も他へかせぐ事なし。若惡事等かれど。其邑戎拂ふ。其ものもまた他村へ行て雇となる。さて親族一類ならざる取組を恥る故ふ上下睦じ。今松前領内ふ蝦夷あり。是も古へよりの蝦夷ふ

そ非^レ也。大^レき追拂^スそれたるものどもなうといへ。

千嶋志料

必聚諸有瓜葛親者。故其稱親戚者。終古無相絕理。男女家其父母相許婚姻於幼稚時。男家遺女家以小口。以爲誓名曰革失。復妻妾無定數。富者至有十餘妻。蝦夷風土記夫を持事也。二三歳の頃其女の親聟^{シラフ}ふとるべき者の親と約束をなし。幼稚の時より言號極りあり。若其女外の男と念頃など^{シテ}ゐるとたゞ。甚ざ六ヶ敷償沙汰となり。多くハアシンベをとらるゝ事なま夷諺俗話附りオロツコ人の結婚も其同種の者みゆらざる

ようハ異族の者と通ひる事をなさば。北蝦夷圖說

○喪事

○喪式の事

生平甚惡言死。亦曾不忽死事。四方遊行。必挾歛葬具新服新席。卷爲一束。未嘗離身。富家具木棺。窀穸莫所不至。既死而埋之山。名曰多訖利。上建表木。名曰設獨泊。生平挾用器物及珍寶。盡殉之地下。死後釀酒行禮。其酒一夜而成。名曰客由子。賴立死者之家必燒之。爲其子弟者別作廬屋之。不窺門戶。或有不可已事出行。則着冒木皮服。居喪中不食生魚。獨喫乾胰。喪終而新造屋。凡喪子爲親

妻爲夫皆一年。寡婦之再嫁者。必終喪而後適。若或父母兄弟有橫死者。知友來弔者。持刀斫其額一下。以痛楚忘却悲愁也。又云。以使其人痛楚想父母兄弟橫死之苦也。名曰滅革鳥地。凡與有喪者言。以忘憂爲主意。故或語涉悲傷則怒矣。令人懷憂心也。蝦夷風土記

凡親族比喪ある。其服制ぬすて。是を以て其頸上を包み。父母比喪ふを常服の裏を表として服とす。又其頸髪を斷ざる事。三年を限りとい。喪中をカントウとて。日光を恐れてうけず。カントウとて。即夷方比天をさしたる詞ふして。日光をうけずとなれ。松前志

蝦夷父母ふ仕ふるふ至て孝なり。父母死せる時ふそ。夷の法ふや死骸窓より出し。夫を山ふ葬みて後も追善杯といふ事を更ふなし。葬マの法ぬうて草を結びうけて。おのくぬとびさりして家ふ歸マ。夫より木ぬ皮を以て笠を製し。天の日を見ぬして。三年の間を門戸を出るふも。笠戎着せばといふ事なし。家内ぬもの不慮ぬ死ぬる時も。大ひふかなしみ。だとへぞ海杯ふて潮ふ溺き死ぬる時ふぞ。其海ふのぞみて家内のものが残りぬく。近き親類何れも。其邊ふ一所ふ集りて。各おゑを揃へ泣叫ふ。其聲浦々ふ聞えて。その哀れを催

を計らひぬ。是故へクダコヒなげきと稱して。至て遠く聞ゆといふ。婦夷も至てなげきかあしむ時の涙也。目ふハ出だして。鼻より出流るといへり。是等ハ信也べきことふらされども。松前人も誰も見し彼もみうといふ事ゆゑ記し置なり。東遊雜記

死去せ取をさめ方そ。新らしきアツシ戎着せ。むしろふて包み山中へ埋めて。秘藏せし調度の物を。残らば埋め家居を焼きて。家内のあは又別ふ家をほくりて住む事ぬ。壯年のあはといつども死ぬ事をぞかねて心つけ置く事なり。死せし者の婦人を冠物をし

て。凡三年面をのらひさぶる事といへり。再度嫁をることなし。まづて婦人を貞心實意ふして。嫉妬のあはをぬる事なしと云う。北海隨筆

厚岸ヨリの夷。婦人夫死せれど。コンジコロといふもの茂深くかぶり。凡一年程も籠り居て喪をつとむるならひぬ。其内も一族の扶助をばうけだして。獨つゝし。ス居。またようなき孀婦の年老たる舅姑せゐる。或ハ幼稚の者はあるハ。あのきひとりのくちならねむ。かのコンジコロをかぶりながら漁事をなし。外より養ふものなけまば。已むことを得だして。

稼ぎふ出づ。いとあ何怜なる有様なり。まゝ厚岸ふて
ホニコマツといへる少女ありしが。四五ヶ月の間沙
汰せなきま。いかゞしたるとおもひ居るうち。ふと
少女性母ふ出合た達也。まい少女ゲ病氣のほどをい
かふりやと問へば。その母有無のいらへなく。たゞ歎
歎してやまび。おの達也甚氣の毒ふなりて。他の話し
ふ移しけ連バ。それみてやうやくまぎれたるけぞひ
ねすき。ゆべて死したるものゝ噂を語り出れバ。悲哀
甚しく。なき入を再びおもひ出さむるにて。いたく嫌
ふこと。かの地のならひあり。ちをもて墓まひすも

せぬことなすとぞ。おの達也んぢるふ夷人情態死
してかつりみゆぢといふ。そも必輕薄なるふらひ。悲
哀痛疾のあゝろそ尤も深く。渾然たる朴直の質を美
稱するふ足るなり。東蝦夷夜話

蝦夷鳴記。病死せ蝦夷をも布ふてまき。横ふ長く卧
せ棺ふ入。三年ハ家の内ふ置。三年過て地中ふおさめ。
上ふ塚を築木を立。死人ふ所持したる寶物を。一色二
色も塚の上は木ふかけ置よし。男女塚築様異なり。但
右三年内妻女喪を勤。子弟ハ五十日三十日喪ふ居
て。三年を不勤。妻女も三年過て。夫の近き親類の方へ

嫁け。千島志料

家婦又も兄弟の死たる時も。吊祭の式。主人のあとく家を焼事なく、爐を破り捨て。新作るなり。墓小送り遣て器も。鍋かもく針の類。すべて女の業小せし器を墓頭小置ぬ。主人死後とも家婦髪をきらび。帽子をかぶすて。三年の喪を了とむ。蝦夷土産

○埋葬地小標木を建る事

留崩運上屋の北。平原草莽中。小標木を建る者多し。皆夷人の墓なり。蓋埋葬後小祭祀等は禮式なしといへども。唯木柱一本を建て。墓地の印とひせり。此内一

本柱の前。小行器等諸品を置くる所見る。是近來埋葬せしものにして。死者の生前小用ひし物を墓地小供置くなり。觀國錄

○葬祭小蠣殻を用る事

嘗て厚岸の中。冬月大酷寒、大飢饉なる事あり。其時土人死するもの甚ゝ夥し。其尸を葬むるハ皆蠣殻を以て其上を掩ふ。さて櫃小斂めたる尸を。小堂中。小安置して。祭るものゝ如くしたる所。然しども其内小奠供の具。更小見えず。但堂の真作そ頗る美なり。野作

雜記

説譯

○イムル代事

親兄弟妻子等死失^ム時。イムルヒ云て。ウカリ^ム類ひしたる禮式^ム。此趣意^ム死別の愁傷を忘却せん爲^ム。興行^ム事なり。是を名付てイムシとのふ。大刀小刀^ム物のむ称^ム。大勢互^ム額^ムを打合^ム。血^ム找出^ムなり。相互^ム小血^ムを見ざれば止^ム。血^ム出^ムるを待て止^ム。松前土人此を名付て串打^ムと云^ム。是愁傷の伏念を發散^ムして。新^ム清淨なる宜き性^ムを入^ムか^ムる祈禱^ムなる^ム。此時も濁酒^ムを造^ム。大勢^ム振舞^ムするゆゑ^ム。大^ム費用^ムかかる事^ム。蝦夷草紙

○メツカ打の事

メツカ打といふ事^ム。山海^ムて怪我^ムをなし。或^ム横死せるも^ム。親類共^ムにます。吊^ムひとして出^ム叉^ムをもつて。夷人の頭^ムを一打^ムづ。互^ム打^ムて血^ムを見て。これをともらひ^ムひと^ムなす。北海隨筆

蝦夷志曰。夷人没^ム則多^ム群集^ム。抽^ム刀互^ム打^ム額^ム流^ム血^ム。相責^ム以^ム不孝不悌之罪^ム。謂之メツカ打^ム。亦齟齬^ムせり。メツカ打^ム。入死^ムバ弔^ム小非^ム。災難^ムふ遇者^ム。間々親族集^ム。刀を抽^ムき頭^ムを打^ム。再災難^ムふ遇べき^ム。贖^ムひ除^ムくといふ。是^ム日本^ムの俗^ム。一度災難^ムふ^ムへむ。必^ム毎有^ムと云^ム。

豫是を除く。自から責め。或も衣服重寶のるい代。
人不知路ふきて。或々寺社ふ奉納す。己の意なるべ
し。蝦夷國志纂聞

○北蝦夷葬式の事

一葬禮も蝦夷嶋と大小異よして。凡首長たるも死
する時も。先腹を裂て腸を去る。家内ふ別床を設け。
其上ふらげ置。日々女夷をして。水をそく。是を洗
しめ。日ふ乾して。腐敗せむとならしむ。是を名付
てウフイと云。如斯くる事凡一年許の日月を経て。
その四肢身體少しくも臭腐のむとなき時も。大ふ

女夷を賞して。衣服酒煙草等類を與ふ。若小くも腐
敗する事有ふ當ては。忽女夷を殺して先ふ葬す。其
後死人を埋葬ひと云。

女夷を殺すの事。近代より廢するふ似たり。
一棺を長大ふして。其文彩を彫刻する事。實ふ精工を
極るふとなれど。衆夷力を盡すといへども。凡一年
許を経るふらざれば。其巧を終るふと能む。此
棺成るを待て。死人找納め送葬すといへども。地中
ふ埋没するふあらば。唯地上ふ暴露ひ。
一女夷を地中ふ埋葬して。牌を立るなり。

一凡死者死る時も父子兄弟親族の者もいふふ及む
す。他人といつども相集みて。涕泣哭むるふと。蝦夷
嶋亦然りといへども。唐太嶋尤厚といひ。總て夷情を
熟察するふ。七情中哀情殊ふ深きふ似より。死者せ
事そ年残經る後といつども。談話するふとを忌み。
若言已あとを得ずして。其者の死状を説ふ至らむ。
他人といへども涕泣して是を語り。或離別して後。
其入れ事狀言ふことを忌み。言其事ふ及ぶ時も。相
思せ情ふ堪ざる残じてゐづし。故お葬祭せ事も。
詳聞することを得ざりしと云。

貧賤夷のあときそ。葬事總て蝦夷嶋の如し。
一蝦夷嶋死者死る時も。家を焼事あり。唐太嶋是をな
さず。唯横死せむの死る時も。其家を焼北蝦夷
圖說と云。
唐太夷人。喪禮也。夷人初て死むるときも。凶物みて
死者せ後門をえぐり。其穴より臓腑を拔出し。骸骨の
中少毛汚穢なきやうふ。極めて淨潔小洗ひ滌ぎ。布を
以て拭ひ乾し腐ざるやうふ。若不潔ふて腐る事の
るときも。其臓腑を去る事不念ぬうとて。其者より夷
俗の償を取る事なり。此死骸の臓腑を抜きのそ。平生
豫め言かせ置き。兼て其人究む死る事なり。扱屍を

干乾して。凡三十日あども閣き。その間小親族集りて。木を伐り棺せ箱を製するなり。箱比大き長凡七八尺許。廣凡四尺許。箱の中へ此方せ刀掛の如きをせを製して。尻せ動うざるやうふ枕するなり。唐太地を三十日不ぞして葬り。奥地タライカ。オリカク邊そ。三年の間乾し曝しをくなり。其棺を山へ昇き行。半そ土へ埋め。半そ土よう出せ。棺せ上ふ此方せ神社の堅魚木せ如きをのを。製して上げ置なり。按乎唐書室革傳乎。毎部共ふ構大棚。死者寘尸其上。喪期三年と見え。間原新志乎。女直一種曰苦元。新死剗腹去腸。曝乾炙之飲食必

祭三年後棄之と見えたるも。此等の俗なるべし。邊要

考圖

○祭祀追加

○漁獵の爲ふ神を祭る事

夷家窓の外四五歩隔て。イナヲを立つらね。牆を結たるべ如く。其先ふ鹿の頭をつらぬきたる所す。もいづきの家ふも有て。神を祀めるものなり。そなよふ向ひて窓を穿つふ。より内を決して覗う。殺せし熊の出し入しあ。此窓おうむる事なり。蝦夷人熊をカムイとなせバ。取扱ふこともまた嚴なり。さてイナ

ヲも夷地にて神を祝する幣なり。爐邊ふ立るも長一尺ほどなり。漁事始まれば。所の乙名イナヲを削りて。うやくしく會所へ呈して。大漁カラん事を祝するなり。東蝦夷夜話

久遠の内ふクントエトといふ小岬カラ。今エナヲ崎と云。土人等漁始の時。爰ふて海神を祭るふ。木幣を多く立るなり。西蝦夷日誌

幌泉ふ。チヨマトマリと云大岩窟カラ。名義恐敷神グ。在モ故と云。土人等漁事始めると。必神酒木幣を捧て。其大漁を祈る事なり。東蝦夷日誌

擇捉及び得撫島の土人モ。云々死後來世カラることをあらず。唯日月を尊敬せるのみ。但山神水神を祭ること。山林に入ても禽獸の獵たやすく。且柴薪ふそしのうざらん事を願ひ。河海ふ祓てモ。魚漁の多カラむこと。残祈るとなす。千島志料

マツコ泊の沖ふオカモイ崎カラ。高さ五六丈の立岩なり。鮓取船安全の爲ふ。俵ふて船形を製し。神酒并ふ繪馬を積流して祈ると。同上

海邊の砂ふ處々イナヲ立さう。蝦夷則此幣ふ漁利を祈るとぞ。

唐太海岸ふ。魚獸の首を供し木幣を添て。海神を祭る事。蝦夷島のごとし。同上

○神漁時を教へし事

東部長万部ふ。むりし神有て此所の海ふ釣し。大比目魚を得たまひ。土人ふ教へて曰く。此魚も神なり。我れと山ふ祭らん。以後春ごとふ。諸山雪消て後。此山ふの形したる殘雪有べし。其時汝ら此海ふ出て漁せば。多くの比目魚を得んと教へ給ひし。依て今ふ至るまで。そのをしひの如く。山の端ふ夏迄魚の形ふ雪残り。故ふ雪比目魚ウツミシヤマニベと云。長万部ラシヤマニベの地名ハこの名義な

るよし。

東蝦夷日誌

○神食料を教へし事
十勝字工チキシヤイふ。むろし神クモリが此所ふて空腹なりし時。シユウキナを採て食し。

シユウキナ。松前方言ニウといふ。羌活の一種也。故ふ饑を凌ぎ給ふと。夫より土人食してよろしき事を教へ給ひしといふ故事有。爰ふ其神を齋て。木幣を立て祭りぬ。同上

○家内ふ神を祭る事

唐太夷家の内。正面ふ小き閣を設け。其上ふ小祠を置

て。家毎ふおきを祭る。祠中ふ木製の神主あり。何もの
なる事をあらば。蓋守家の神なるべし。千島志料

○トウシカムイの事

酒さけを奉る。河の神みかんを祭る。二たびまぐくる。天地山川
の父みち母めなど。手て向むかる心こころなりやと。疑うなづくものなし。ある
らば。先さきトウシカムイを祭まつ。

トウシカムイも。いよしひの賢き神みわ。種々のたぐ
をつくりて。人ひとふ受け給うけふよしめて。我邦われ邦くわより云
神祇じんぎの類るい。又また癪鬼痘鬼魑魅きじみ也ゆ。同じ。某の神みわといふ。如ごとく。あべて鬼神きじん高貴こうきの人ひと。崇尊そんそんをべき畏懼いにしづをべき

ものものみみあ志しりりいふ。山さんふひ往むかて木きを伐ならんとして。山
神じんを祭まつり。伐なて材ざいを得とて其株その株ねを祭まつる。將まつふ獵りやくせんと
して山獄さんごくを祭まつり。漁うふ海かい河がを祭まつり。新しんふ網あみを結むすて祭まつり。
モ船ふなを造つりて祭まつり。漁獵うりやく久ひしく幸幸なけ達たつバ祭まつり。立
るよよイナヲを用もちふ。性魯せいろふして。禱祀とうしを信しのぐ事こと甚
し。海獄かいごくを祭まつり。漁獵うりやくを祈ねがる。必應ひのうりうといふ。

次つ火神ひじんを祭まつる。貴人きじんより賜まる酒さけをもて。私わたくしふ父母
など祭まつらんハ義ぎふもともとの意いなり。まと其家その釀なを
ひらげば。則まげ。家の火神ひじんふ奉まつす。父母おやしをも祭まつる。上

○カシカムイノミの事

病ふ罹る時も。酋長親族ども各家財。則太刀短刀金銀器。時繪の行器。其外。何とある寶器をかり集め。神ふ奉る形狀。凡延喜式祝詞大祓の祭器の如く。種々の品類を。神ふ贖ひ祓をなせり。これヤカシカムイノミと云。同上

○神ふ伺て道を求め途中安全を祈る事
伎路あり。土入云。此所右ふ行けば留萌。左ふ行けばオシラルカの水源ふ下ると。依て一同ふ山神ふ木幣を奉りて。道を求るや。右の方を得たり。仍て冰雪の上を攀上り。三丈許りの瀧の下み至り。中瀧の上ふ出る爰爰瀧の上ふ出る爰

ふまゝ左右の伎路例の如く山神ふ伺ふや。左と得たり。其時一人峰ふ攀上り。いよく峠なる由みて。此所ふ違モザとて呼もり々る。一同力を得云々。西蝦夷日誌天鹽の奥ふ。力モイルウサンといふ。高さ凡三百丈。もる絶壁。恰も掌を立るハタハタ如し。其半腹より大岩崩落くる。是を往昔爰へ木幣を供へハサハサ通りしらば。岩面崩きて。下行船を碎きし。神威著として。土入等總てイナヲと。煙草米等を一撮つハタハタを供て上る云々。天鹽日誌釧路ふ。ハシクロといふ沼。平日。馬船川原。引上たり。シケ時代のときも。沼水漲りて船渡しなり。雨後も

砂和らりよして踏込甚危し。名義ハ鳥の事なり。むろし白糠の土人。鱈釣ふ出。吹流されし時濛靄モヤ深く何處とも知れぬうりしより依て。海神ふ祈りたれば。空ふ鴉の聲せしりバ。其聲を慕ひ。陸の方へ船を漕よせし。此沼ふ至りしと。依て其土人あすふ木幣を製して。此沼ふ立祭りし跡今ふ有。東蝦夷日誌

○襟裳明神の事

東部エリモ岬の岩上ふ。エリモ明神の社あり。夷言エリモとモ鼠をいふ。土人の傳ふむ。うし此邊ふ大鼠出

くると祭る。又一説ふ。出岬の形鼠頭ふ似くる故ふ名

づくとも云う。方九尺をあうの小祠なり。明神の神体とて。鼠ふ乘くる形のもの有。此海路徃來の船入々手向して船をやる事となり。野作東部日記

○神鳴物を好む事

西地。太田山ふ小堂あり。參詣者の籠堂と。此岬を通行する船。必帆を少し下げ太田山を拜をと。さて此神を笛太鼓三弦等を好み給ふよしと。あくを通るふ鳴物を持ゆけば。必風變りて此所ふ吹附ると。其時鳴ものを寶前ふ納め。順風を乞ふ。靈驗著しと。又奥地へ持ゆのんと欲せば。二品を持來て一つを爰ふ納め。

一つを持行ふ。必海上より過有事なしと。依て寶前より種々の鳴物を積上さう。西蝦夷日誌

○神を祈るよ踊舞事

三石字タフカニといふ所ふ。檜大木數圍のもの有。其枝地ふたれて盤屈し。恰も踊舞手振の如し。神靈著しきよしよて。土人尊敬して。願事らる時ハ。此前より踊ると云ふ。東蝦夷日誌

○義經朝臣を神ふ祀る事

沙流會所の乾山を開きて。義經朝臣を祀る祠有。前殿稻荷辨天義經同社なり。かくもらの小祠ふ。金毘羅

白鹿明神を祭る。白鹿を昔土人獵して。白鹿を獲たるふより。神どぬりめしとぞ。土人亦傳ぐる。シノタイの東奥山ふ。昔義經を祭し所有て。木幣を奉りて尊敬しきる。享保二年中。比企可満と云人。祠をあつて徙して。祭る事となきうとぞ。野作東部日記

原野中ふ。往々小さき華表の形建くるを見る。土人ふ問へば。判官の神を拜むなりと答へ。未曾有の記唐太クシユンコタンの南岸の西山下ふ。義經社辨慶社有。いつの頃。何人の建る。未考へ。千島志料病氣又を怪我焉やまち。何ふよらひ。惡き事也。太義公

官とて北山の上ふ宮作り。此宮ふ行祈願ふなり。
是を徃古源義經奥州平泉城みて合戦のをう。落城ふ
及びしりバ。義經公蝦夷へ落給ふ。後ふ神と崇め太義
公官と名づけて。日本人の氏神を祈る如く。十里二十
里ハ。いふふたよそ。五十里百里の道をいとも。參
詣し尊崇をあす。千島志料

○巖石を神と尊信する事。入山者多く。奉事者
西部ふ。アナクトウといふ所有。大岩聳えし腰ふ穴阿
リて其上ふ貫けり。神靈ありとて土人木幣を立て尊
敬す。岩面ふ水滴出る。土人等切疵打身ふ附る。即功

石りと。西蝦夷日記
小樽より錢函への海岸通ふ。カモイオロシ。訛てカモ
イコタンヒ云所あり。崖高さ二十餘丈。掌を立たるり
ごとし。さて其毎時々崩落る故ふ。土人必う。みて
木幣を製し。山神ふ手向無事を祈て行。去寛文度始て
崩き。其翌年東部染退の亂有。天明八年まゝ崩きて。國
後亂あり。文化三年五月崩きて。露西亞人來るの亂有。
文政四年四月崩きて。其翌年復領ふ成。弘化三年三月
崩きて。同年五月宗谷へ異國船見え始めしより。四海
み出没し。擇捉の漂客を始とし。其餘處々の漂客相始

モ。何ウ此地凶事有る時。必其驗有り。依て神處とて
土人共尊敬也。同上

様似のトンタヘレケの出岬。大岩の間。纏ふ二間
許り離れて。高さ七尋と云。岩あり。オクシノボリとい
ふ。此岩石門の如く。竪二間餘。横三間許。の穴あり。夷
人傳云。往昔様似より。稻荷の神の神箭もて射貫き給
ひし跡なり。依て岩山稻荷を祀り。ト。野作東部日記

○神木の事。鑿高。二十尺。大草す。立。根。唐
唐太ナヨロ。ヨリクシユニナ。イの山越して。東の方マ
アヌイ。ム至る。此山路。ムチトカニカムイ。まゝチトカ

